
折れない華

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

折れない華

【Zコード】

N5471M

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

以前のお話を 大幅に変更します。

日向 蒼は、クラブ『AZAM』の歌姫。今日も、その歌声を来店するお客様達に聞いてもらひ。そんな中、常連さんと一緒に来た初来店の男性に声をかけられた。

「もう 逃がさない」

蒼は、彼のことを知らないのに　彼は、自分のことを知っている？

忘れた華

「あれ…………わたし　なんで…………こんなところにいるの?
とこりよつ…………いいは、どこなんだろ?」
それに　こんな　自分が　ないみたい。
一体　どうなつてこるのかしら」

「とにかく　このままでは、いられないわ?
絶対　お母さんだつて　心配してくるはずだもの。
それにしても……おかしいな?

わたし　学校から帰つて……その後から　何にも覚えてない」

「あれ?　この手首の傷…………いつ　出来たもの?　覚えは、ないの
に。
何だか　怖い。短らない間に　血分が、何かをしたみたいだし。
一体　どうなつてこるんだが?」

「誰も　いないよね?…………逃げるんなら　今のうちにね?
にしても…………ここは、家の?　どうかの匂い敷なの?
無事に　出口に向つてひざに口出す
「…あなたが」

小鳥は、こうして
籠から抜け出し 飛びだつていった。

～～～～～

「あおぢや～ん…………」しつちも、よろしくねえ」

その声に 背の低めの少女は、風のようすに走つて そのテーブルのグラスを下げる。人々は、そんな彼女の様子を微笑ましげに見つめていた。みんな 彼女のことを見つけていた。だからこそ 守りたいと 思つてくれているのだ。

「オーナー…………あれから 2年になるんですね?」ボーアの青年は、小さく 呟く。

その言葉に サングラスを掛けた 男は、息をついた。

「そやな?あの子も、一生懸命 頑張つとるわ。
あんな事が、あつたつていうのに……健気なもんだ。まあ 忘れているんだけどな?」

「俺は、忘れている方が 彼女の為だと思いますよ?じゃないと笑顔でいられるはずがないんですから。あの時だつて……俺達は何にもしてあげられなかつた」

少女は、何か原因があつたのか 14歳から18歳までの記憶を失っている。20歳になつた 今も 何も 思い出していない。この生まれ育つた 街を出る原因になつた 事件のことも それ以降の足取りのことも、何も覚えていないそうだ。ただ 気がつくと覚えのない 大きなお屋敷の一室にいたらしい。何が何だかわからずすぐに そこを出て ここへ 戻ってきたそうだ。

そんな中で 違和感が生まれ それは、大きな不安へと変わる。彼らが 駆けつけた時 少女は、酷いパニックになつていた。

「今は、見守るしか出来ない。忘れてしまっていることは、それだけ何かがあったということになるんだから。余計なことをすれば ガラス細工のように壊れてしまうかもしれないんや」「そうっすね？俺も陰で支えたいと思つてますよ」

2人の視線の先では、少女が 元気よく 走り回つている。

ここは、クラブ『AZAMI』。

昼は、カクテルの専門店として 店として成り立っている。スタッフの主は、女性であり お客様の座る テーブルで お酒を飲みながら 接待するので 水商売とは、変わらないかもしれない。けれど 他のお店と違い ここは、無理なノルマはなかった。だから 雇われる側としては、最高の仕事場だ。内装も、近代的で 夜をイメージする エクゾチックさは、ない。逆に 女性のお客に 好まれそうな シックな空間が広がっている。営業時間は、夜の2時まで。客層は、様々で 落ち着きのある 客が、多い。

店のオーナーは、ラテン系の血を受け継ぐ 独身男性で 実は、店のホステス姉さん達に 人気がある。ただ 残念な性格をしていて その余計な行動や言動が、なければ もっと モテるのだろうが。それでも 店の話になれば 賴りになる 男性であり スタッフ全員に 慕われている。元々 違うお店のボーイをしていたらしく 人の顔と名前を覚えるのが、得意らしく 客によって ヘルプの選抜が、的確だ。だからこそ お客様からの人気が、高いのだろう。中でも 店の自慢は、日替わりに行われる ショータイム。それを 目当てに 店を訪れる お客様は、少なくない。ショーターに参加する スタッフも、乗りに乗つて ショーを行つて いるのだから。中には、昔 プロを目指していたものの 様々な理由で 断念せざる得なかつた人達も、多い。

店のスタッフ達も、個性的な集まりだった。元は、男性だった N^ナ O^{ンバ}・W^ン のお色気抜群のホステス。ホストのように 女性からの支持のある 宝塚の花形のようなボーカル・シチュなホステス。耳は、聞こえないが 観察力がズバ抜けていて 似顔絵が得意なホステス。堅

物だけど 激しいツンデレで 可愛いものに田の無い 武道派なホステス et c. お姉系なボーイもいるし 無口だったり おしゃべりだったり ナンパなのもいるが、仕事になれば 優秀だ。

日向 蒼は、この店のアルバイトだ。昼は、簡単なノンアルコールのカクテルを専門に扱い 夜は、ショーを行つ スタッフとして。ただ 男性になれない為 接触^{ボディーカッチ}は、無理なので 自分のショーがない日は、各テーブルの雑用係^{ヘルプ}をしている。中には、いきなり抱きついてくる客もいるが 店内の限られた 男性陣や蒼のことを知っている 常連さん達が、その魔の手から 守ってくれた。そんな彼らの元にいるからこそ 蒼は、幸せだ。

それが、いつ 壊れてしまうかななんて 思いもしなかった。ずっとこの楽しい時が、あると 思っていたのだから。

「やあ 蒼ちゃん」

見知った 声に 蒼は、嬉しそうに 振り返った。その視線の先には、笑顔を浮かべた 常連客の姿が。彼の手には、大きなテディ・ベアが、ある。それを見て 彼女は、更に 目を輝かせた。
 彼は、蒼が このクラブで働き始めてから 最初に指名してくれたお客様なんだ。最初は、このお店に来るのを渋っていたらしいが 今では、週に何度も通ってくれる。職業は、お医者さんらしく 蒼の不調など すぐに気が付いてくれた。若いながらも 優秀なお医者さんらしい。見た目も、美形さんなので 独身時代は、相当モテたはずだ。

「藤堂さん…… また 来てくれたんですね? だけど あんまりお店に来ると 奥さんが、怒りませんか? だって 新婚さんなんでしょう?」蒼は、悪戯っぽく 言つ。

「奥さんは、寛大だからね? 今は、ちょっと 忙しいんだけど 時間が空いたら 一緒に来よう って 誘つているところなんだ。きっと 蒼ちゃんとも、仲良くなれるなれるんじゃないかな?
 我僕なところは、あるけど 悪い人じやないし。一人っ子だったら しいから 君みたいな妹が、いれば 嬉しいだらうし」「
 藤堂さんは、そう話しながら 楽しそうだ。

初めて お店に来た時は、不機嫌で 店そのものを嫌つていつにしか 見えなかつたといふのに。今では、他のお客様とともに 仲が良くなつてゐる。ただ 彼をここへ連れてきた 同僚の人達は、とても 心配そつた。何でも 藤堂さんの奥さんは、彼らが勤務している 病院の院長先生の娘さんらしいのだから。万が一 ク

ラブ通いが、知られてしまえば 大変なことになってしまつらさい。
だから 蒼も、それとなく 踏み込み過ぎないよう に と 彼らか
ら 忠告されている。奥さんの実家の財力なら このクラブも、簡
単に 潰してしまつらしいから。こんなにも いいお店を、簡単に
失いたくない。だから 蒼は、その忠告を守つて いた。

けれど そんなある時 危険な状況に 追い込まれることになつて
しまう。

「蒼ちゃん…… 今日は、妻が 一緒に店に来たんだ。君の話をし
ていたら 彼女も、興味を持つてくれてね？」

蒼は、その言葉に 呆気に取られてしまつ。勿論 近くのテーブル
にいる 同僚達も。けれど 藤堂さんは、心から 嬉しそうに 話
を続けて いるようだ。

どうやら 藤堂さんは、あまり 周りの空気を読むことが得意じや
ないらしい。店の雰囲気が、一気に 凍りついたのに 全く 気が
付いていないのだから。

助けを求めるように 蒼は、オーナーに視線を向けるが 肩を竦め
られるだけだ。つまり 自分で 切り抜けるしかないということだ
ろう。

目の前には、藤堂さんの奥さんが 蒼の前に座つている。誰がどう
見ても 怒りを隠していることは、間違ひなかつた。

「どうも 初めまして…… 藤堂 美冬とうじょう みふゆです。貴女のことは、主人から 聞いておりますわ」

そう言って 彼女は、微笑を浮かべた。藤堂さんも、何だか 嬉しそうに ニコニコしている。けれど 蒼は、見えない 重圧に 耐えていた。なぜなら 藤堂夫人は、目が 全く 笑っていないから。おそらく カウンター席に避難してしまった 常連さんや仕事仲間達も、気が付いているはずだ。この空気を察していないのは、藤堂さんだけだから。なぜ こんなにも、氷点下になろうとしている空気に 彼は、気が付かないのだろうか？

それにしても 奥さんは、美人というより 可憐な女性だ。幼さを魅力的に引き出し 立ち振る舞いも、口調も 綺麗なのだから。黒髪は、肩のところで切り揃えられていて 実物大の日本人形を連想させる。今は、白いワンピースを着ているが 紅い着物が 似合うだろう。

「どうも 初めまして。クラブ『AZAMI』アザミ のアオイです。今日は、どうぞ 愉しんでいくください」

蒼は、それだけ 言うのが、精一杯だった。

「うん 愉しませてもらうよ？それに 今夜は、君の歌声を聞くことが出来るんだからね？歌が、とても 上手なんだよ。きっと 君も、気に入るはずさ」 藤堂さんは、奥さんの反応に気が付かないまま 言つ。

この発言に また 気温が下がる。その状態に 蒼は、思わず 小さな悲鳴を上げてしまう。藤堂は、その様子に気が付いたらしく不思議そうな顔だ。

「アオイ……準備だ」オーナーが、言ひ。

その声に 蒼は、体温が下がりすぎた 感覚の消えないまま 頷き返す。

とにかく 今は、ステージに上がらなければならない。他にも 蒼の歌を楽しみにしている お客様は、いるのだから。それに もしかしたら 蒼の歌を聴いて 疑いを晴らしてもらえるかもしれない。そんな考えを持ちながら 蒼は、ショーケースの衣装に着替えて舞台へと向かつた。

～～～～～

蒼は、何時も以上に はりきつて 歌を奏でた。お客様は、それを聞いて うつとり と 聞き入っている。視線を移してみると 藤堂夫妻のテーブルには、見知らぬ 顔が増えていた。

ライトで 顔までは、わからないが 男性が2人と女性が 1人のようだ。話し込んでいる 様子から 藤堂夫妻の知り合いらしい。蒼は、歌っている 最中 何度も 3人の中の1人である 男性と 目が合う。なぜか 彼の視線を感じると 不思議な気持ちに包まれているような気がしてならない。彼も 蒼を、憎んでいるかのように睨み付けているのだから。

蒼は、何だか テーブルに戻るのが 怖くて仕方がなくなってしまった。なぜかは、わからないが 警告音が、鳴つている気がするのだ。けれど 無常にも ショーは、終了してしまつ。

藤堂さん達のいる テーブル席に戻る途中 蒼は、オーナーに呼び止められた。

「蒼……限界がきたら 手を上げろ。そしたら 理由をつけて早退させるから」

その言葉に 蒼は、驚きを隠せない。なぜだか オーナーの目は、本気だつたのだから。しかも 他のスタッフのみんなも 頷いている。蒼は、目をパチクリさせながら 首を傾げた。

「オーナーも、みんなも どうしちゃったんですか? 何か あるんですか?」 蒼は、何だか 不安になりながら 呟く。その言葉に彼は、”大丈夫だ”と 言つて 頭を撫でてくれる。

このオーナー こと 渚潤さんは、見て目こそ 悪人面（ヒドイ）しているかもしぬないが 何かと 面倒見が良い。なぜならこのお店で働いている ホステス達の半数は、多額の借金を背負っている者が、多く ソープなどで働いても 返せるかわからない。それを その借金を肩代わりしてまで このお店で働くしてくれるのだから。それに 蒼自身も 色々な事情があり 街を彷徨つていた時 ここでの仕事を紹介してくれたのだ。最初は、怖くて 泣きながら 街を走り回って 息切れの為 座り込んでいたのが、このクラブ『AZAMI』だった。この店では、オーナーも 他のスタッフも、蒼の事を可愛がってくれる。中でも オーナーは、仕事仲間達曰く 蒼のことを、猫と間違っているらしいが。

昔を思い出している 間に セットしていた ワシワシ と 髪の毛をグチャグチャにされて 蒼は、反論しようとした。けれど そ

の前に 誰かに 腕を掴まれてしまう。

驚いて 顔を上げると そこには、知らない男の人が、怖い顔をして オーナーを睨み付けていた。けれど オーナーは、そんな視線に鼻で笑う。

「見つけるのに 随分時間が掛かつたな？」

オーナーは、ドヤ顔で 相手の男の人へ 言い放つ。その言葉に 彼は、苦々しい 顔をしているようだ。そんな反応を見ながら オーナーは、蒼に視線を戻した。蒼は、分けがわからず 首を傾げるしかない。

「オーナー……………彼は、オーナーの知り合いなんですか？」

蒼の言葉に その人は、目を大きく見開く。

「これのツレの兄貴が、俺の友達でな？名前は、夏目 なつめ 理人 りひと ツレ の名前が、美河 みかわ 融だな？子供の頃から 知っている。

理人は、無口だが 執念深い 男なんだよ。しかも 色んな問題を 抱えていて 慢性の女嫌いだつたんだが 何年か前に 若い嫁さん をもらつたのに 結局 奥さんに 逃げられちまつたらしくて…… それからは、大荒れで 前よりも 女に対しての態度が、悪いんだ

蒼は、オーナーの言葉を聞きながら 彼を見つめる。すると 彼も、じっと 蒼を見つめ返す。

「奥さんを信じていた分 辛かつたんですね？だけど 世界中の女性が、みんな 同じなわけじゃないんですよ？きっと 夏目さんの心を癒してくれる 存在が、いるはずです」 蒼は、ニッコリと微笑みながら 言う。

その言葉に 彼は、衝撃を受けたかのように 凍り付いていた。

その後 蒼は、先に 藤堂さん達のいる テーブルに戻るように
オーナーに 言われた。オーナーは、夏目さんと話があるらしい。
テーブル席に戻ると 藤堂さん夫妻……特に 奥さんの方は、何
だか 戸惑いを隠せない顔になっていた。なぜかは、わからないが
蒼が、歌を歌っている間に 何かが あつたのかもしれない。

「奥様? 何だか 顔色が、悪いようですか?」
蒼の言葉に 藤堂夫人は、言葉なく 首を振る。

「ちょっと 遠出をして 疲れてしまつたようでね? 大丈夫だよ。
それに 初めて こういうお店に来たからね? 雰囲気に 酔つてし
まつたんだろう」代わりに 藤堂さんが、答えてくれる。

けれど 蒼は、違和感を感じる。なぜなら 同じテーブルに就いて
いる男女が、先ほどから ソワソワしているようだから。もしか
したら 彼らが、夫人に 何かを言ったのかもしれない。

「蒼ちゃん……この2人のことは……」藤堂さんが、少し 言
葉を濁しながら 聞いてくる。
その問いかけに 蒼は、首を振った。

「初めて お会いします。この方々は、藤堂さんのお知り合いなん
ですね? オーナーのお話だと ご友人の弟さんのようですが。
お名前を伺つてもよろしいですか? お連れの方は、オーナーに紹介
していただいたんですけど」蒼は、全員分の飲み物を準備しながら
聞く。

蒼の自然な質問に 見知らぬ男女は、顔を見合させる。何かの衝撃

を受けてしまつていいるかのようだ。それは、夏田さんの反応に少しだけ似てゐるかもしれない。

「僕は、^{みかわ} 美河^{とおる} 融^{ゆう}。彼女は、妻の留美^{るみ}」

男性の方は、そつとつて自己紹介してくれた。名前を聞いて 蒼の頭の中のノートに 新たに 顔と名前がインプットされる。

美河 融 と 名乗つた 彼は、人柄の良さそうな顔立ちをしており 黒渕の眼鏡をかけている。奥さんの留美さんは、少し 年下のようで どにか 優げだ。

「美河ご夫妻ですね? 初めまして 先ほど 歌わせていただいていました クラブ『AZAMI』のアオイです。よろしく お願ひします」

蒼は、営業用のスマイルで 一ヶ口り と 微笑む。その微笑に彼らの表情が、固まつた気がする。青いが、不可思議そうにしていると 後ろから 声オーナーと夏田さんが、戻ってきた。

「やあやあ…… 遅くなつたな? こいつが、無様に 落ち込んでいたもんだから」 オーナーは、呆れたように 言つ。

その言葉に 蒼は、溜息をつく。

「オーナー………… いくら 顔なじみだからって 相手は、お客様なんですよ? そつじやないと 示しが、つかないじゃないですか。これで 変な噂が、出たら オーナーの責任なんですからね? それだけじゃなくても 最近 お店の雰囲気が、壊れてきているみたいですし」

「おいおい それは、誰かさんせいだらう?俺の責任じゃないぞ?

「やうやせでいるのは、どにのどなたでしょ?」

背後から ドスの聞いた 声が聞こえてくる。振り返つてみると そこには、しかめつ面のホステス仲間の姿が。どうやら オーナー の言葉は、しつかり 耳に届いていたらしい。釣りあがった日の端 が、ピクピク と 引きつっているのだから。

「あおちゃん……ちょっと この馬鹿に話があるから 連れて行 くわね? 一応 ヘルプに ミコキを置いていくから」

「はい ナナさん。けど ほどほどに。オーナーの悲鳴は、お店で も面白い催しになっていますけど 初来店のお客様もいますから」

「ええ……手加減するつもりだから」

オーナーは、顔を真っ青にさせて 彼女ナナさんに 引き摺りれるようこして 奥に連れ去られていった。

「どうもヘルプのミコキです」

ミコキさんは、そう言って満面の笑みを浮かべている。挨拶されて藤堂さん以外の畠さんは、まだ呆然としているようだつたけれど頭を下げている。

実は、この人……男性。といつても去年正式に戸籍も女性に変更した二ユーハーフ。自然な体のラインをしているから最初は、信じられなかつた。けれど畠の写真を見せてもらつて納得せざるを得なかつたのだ。

「畠さん アオイさんを可愛がつていらっしゃるんですね」留美さんが、何かを気にしながら呟く。

「ええ……あおちやんは、このクラブの歌姫ですもの。それにふわふわしていて放つておけないの。お密さんの中には、本当の娘のように思つて下さつている方もいるくらいなんですよ?」ミコキさんは、妖艶な笑みを浮かべながら言つ。

その言葉に蒼は、”そこまでは、大袈裟じゃありませんよ”と苦笑する。

確かに何かと子ども扱いされていることは、否定できなけれど本気には、されていないはずなのだから。さすがに等身大のティベアをプレゼントされた時は、言葉を失つてしまつたけれど。

「失礼ですがミコキさん?貴女…………御影美幸さんじゃありますか?何度もパーティでお会いしたことが、あつたと思つのですが?」

藤堂夫人の問いかけに、ミコキさんは、一瞬、目を見開いたようだつたけれど、微笑を返す。

「あり……お久しぶりですね、美冬さん。でも、今は、ミコキなんです。戸籍の方も、性別変更の手続きが、終わりましたし。御影とは、縁を切つております。

美冬さんも、あまり、わたしの名前を出さない方が、よろしいですよ？」

夫人は、それを聞いて、黙りこんでしまう。どうやら、ミコキさんは、性転換する前、資産家の「ご子息だったらしい」のは、聞いたことはあつたけど、相当な家の出のようだ。こういうことには、疎いから、知らなかつたけど、話を聞いていた他の皆さんは、呆気に取られてしまつていているようだから。

「それにしても、蒼ちゃん……歌、聞き惚れてしまつたよ。最後に歌つっていた歌は、何て言うんだい？」

藤堂さんの言葉に、蒼は、嬉しくなる。だって、あの歌は……。

「あの歌は、亡くなつた母が作つたオリジナルなんです。わたしが、生まれる前まで、路上で、ストリートライブをしていたらしくて。

わたしが、生まれてからは、よく、子守り歌代わりに、聞かせてもらいました。今日は、オーナーの許可を頂いて、1曲だけ、一番のお気に入りだつた歌を歌わせてもらつたんです」

「元々、あおちゃんが、クラブの歌姫になつた、キッカケも、あの歌だつたものね？」ミコキさんが、思い出したように、呟く。

「ですね？お陰で、今のわたしが、あるんですもんね？じゃなかつたら、住む場所も、お金も無くて、どうなつていたか。何がどうなつてているのか、全然、わからなかつたですし」

蒼の言葉に、美河夫妻は、何か、深刻そうに、顔を見合させた。そ

して 2人は、夏田さんに 視線を送る。

「一体 どのような 状況だつたんですか?」 夏田さんが、どこか震える声で 聞いてきた。

「わたし……記憶が無かつたんですね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5471m/>

折れない華

2011年9月1日04時50分発行